SPECIAL

特集 さまざまな課題に対応するために

学びたいことを探し，選び取っていく学習
―自律的学習への第一歩

亘理陽一（静岡大学）

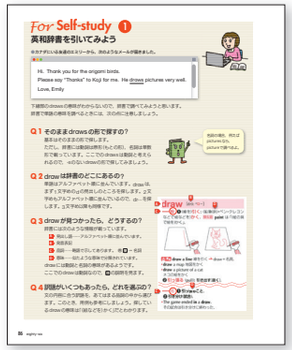
はじめに

「自律的学習者」は，学習管理・認知プロセス・学習内容という互いに関連する３つの次元において自分の学習をコントロールできる学習者だと言われます（Benson, 2011, p.61）。もちろん学習者は最初から自分の学習をコントロールできるわけではないので，中学校３年間の目標に全ての次元の完全なコントロールを置くのは求めすぎでしょう。だからと言って，自律に向けて何もしなくていいということにはなりません。卒業後も長く続く外国語学習において学びたいことを自ら探し選び取っていくためにも，種を播き，芽吹かせるために，中学校の内にできることはたくさんあります。当然，その過程で教師が担うべき役割も重要です。

「学習管理」には，「学習の目的を決めたり，学習のために取る方法や学習のために必要な技術を選択したり，学習のペースや学習時間をモニターしたり，学習を評価したりすること」が含まれます（大学英語教育学会学習ストラテジー研究会（編），2006, p. 17）。教科書はまさに全体を通じてその主要な手段を提供するわけですが，*28NC* には特に For Self-study や Review というコーナーが設けられています。これを活かさない手はありません。

辞書の活用と語彙学習方略指導

28NC では各学年で，辞書の使い方や活用法，語彙学習法を紹介しています。それまでに学んだことの確認やまとめとして取り上げるのも１つですが，むしろ学習のきっかけとして活用してはどうでしょうか。例えば *Book 1* の最初の For Self-study「英和辞書を引いてみよう」は Lesson 7 の前にあります，その前の Lesson や Project で辞書を引く機会があるでしょう。その際，このページに立ち寄って辞書の引き方・見方を解説することで，「自分が何かを伝えたり理解したりするために必要なときに辞書を引く」という学習管理の経験となります。



Book 1
For Self-study ①

同時に，教室にある辞書や学習者が持っている辞書との異同，そして辞書が与える「語義」と文脈に適切な「訳語」選びの違いを確認することも重要です（笠島，2002）。複数の辞書で用例や似た単語の使い分けの説明を比較したり，*Book 2*「英和・和英辞書を活用しよう」で，身近なカタカナ語が英語でどう表現されるか収集したりと，それ自体を調べ学習とすることもできるでしょう。このような活動を通じて初めて，For Self-study や Review が学習者にとって「いつでも立ち戻ることのできる場所」になると考えます。

語彙学習については，*Book 1* と *Book 3* に分けて，音声化・身体化・文脈化・ネットワーク化・リスト化の各方略を紹介しています。こちらも，各 Lesson の語彙の導入・定着のための観点として活用することができます。普段からこの観点でのセルフチェックを促すことで，授業外でも，孤立した単語の綴りを目で見るだけで覚えた気になる学習者は減るでしょう。その前に教師が，既習語やこれから登場する語句を用いて，各方略の組み合わせ方の具体例を継続的に示すことが重要です。教師の，音声化や身体化をためらわない姿や，身近な例に置き換えたり関連するものをつなげたりするアイディアが語彙学習のモデルとなるのです。

学び方のレパートリーと学習の履歴

Book 2 と *Book 3* で紹介している映画や音楽，インターネット等を通じた英語学習法は，具体例を増やすことが重要です。*The Tale of Peter Rabbit* の実物やビアトリクス・ポターを描いた映画を紹介したり，小笠原諸島や寿司が英語のウェブページでどのように紹介されているかを検索して見せたりすることで，教科書で学んだ内容をさらに深めることができます。

Book 3「教科書の外で英語に触れよう」で取り上げている山中伸弥教授の講演は，内容は専門的で，そのまま見せるだけで中学生が理解できるとは考え難いものです。ここでの主眼はむしろ，インターネット上の英語（学習教材）を始めとする様々なリソースの活用法を考えることにあります。これまでのラジオやテレビ番組と同様に，たとえ生の英語が豊富に用いられていても，漫然と見聞きしているだけでは理解もできず，学習には繋がりません。ここで提示されているような目的やステップを学習者が自ら設定できるようになるのが理想ですが，まずは授業での活用を通じて，理解が深まる経験を増やしましょう。例えば同じ *Book 2* の Let's Read 2 は TED でのスピーチと繋げることができます。

現状では，学習者がみなこうしたツールをいつでも利用できる環境にあるわけではないでしょう。しかし，だからこそ，授業内外で教師自身が活用の姿を示し，求められたときに学習者に的確なアドバイスをできることが望ましいと言えます。教師自身がこれまでに取り組んできた方法・経験を伝えること，あるいは生徒同士で学習法のレパートリーを共有する機会を定期的に設けることも有効でしょう。そこから興味を広げたり，自分の好きなものと英語学習の接点を見いだしたりできれば，学習者にとって英語が「わがこと」となり，学習目的も明確にしやすくなります。

Book 3
For Self-study ②

同時に，ワークシート等を通じて学習者が経験した学び方や内容の履歴を蓄積していけるようにすると，For Self-study や Review は３年間を通じてさらに効果的なものとなるでしょう。これは，辞書の活用・語彙学習方略についても当てはまることです。引きっぱなし，やりっぱなしにせず，自分がどういう単語をどういう場面で調べたのか，方略の使い方はどのように変化してきたか確認できるようにすることで，学習のモニタリングが促されます。教師もフィードバックを返しやすくなるでしょう。

おわりに

重要なことは，いずれも学習者任せにするだけではその真価を発揮し得ないということです。「学習者は意味のある選択の機会を与えられることでやる気を出すのである。やる気があるから選択をするのではない。学習者にとって意味のある選択の機会を提供するには，教師は，選択の幅と質を整え，学習者を選択できる状況に導いていかなくてはならない」（青木・中田（編），2011，p.10）。*28NC* の For Self-study や Review がそのための一助となることを願っています。

【参考文献】
青木直子・中田賀之（編）（2011）．『学習者オートノミー』ひつじ書房．
Benson, P.（2011）. *Teaching and Researching Autonomy*（*2nd ed.*）. Harlow：Pearson Education.
大学英語教育学会学習ストラテジー研究会（編）（2006）．『英語教師のための「学習ストラテジー」ハンドブック』大修館書店．
笠島準一（2002）．『英語辞典を使いこなす』講談社．